

## ○倉座敷

岩代服部水仙子

(一)

雨垂れの音も絶えく／＼て桐の大葉を渡る風サラ／＼。

世はまた秋となりて、今日も亦霧の雨窓を打つ。

廊下續きの母屋かけ離れた倉座敷、今千代子の寢臺は運ばれた。義母の計ひ、閑靜なれば病人の爲めにはとは、至極お尤なれど、傳染を恐れての體よき避隔法とは誰が目にも。

座敷の時計二時を打つて、劍ある咳拂ひ一つ、義母の忙しそうな絹ずれの音、彼方に消えていった。

よろ／＼する身を、乳母に助けられて靜々と廊下傳へ、戸は開けられて、我を待つ薄黒闇、ハラハラと散紅葉の二葉舞ひ込んだ。

『あゝ乳母や私も此處で死ぬのだよ』

その艶のない顔に光る露の一雫、豊かな乳母の胸に何と染み入つたであらう。

『何とお仰言いますお嬢様！』

しツかと抱いた千代子の體、之がまあ二年前まで、あの福々としてたお嬢様であらうか、いた／＼しい此瘦せかた、如何してお大切なこのお病人をこんな陰氣な處に入れられようぞ、奥様もあんまりな！

『竹や早く此のお薬を倉座敷に持つてお出で』

茶の間に響く義母の聲に千代子は我知らず足を踏み入れたのである。

(二)

天井の低い小ぢんまりとはして居れど幽靜なれば幽靜なるだけ微かな物音も心に響く、風通し宜からぬ倉座敷、十疊敷きの其丸窓の許に千代子が寢臺は据へられたのである。床の間の薄墨繪の掛軸少々古く一輪差の白ばら清いけれど寂しい。藥の香は早くも室に満ちて昔を思ひ起す。亡き母の病當時、さては姉が最後の微笑み顔あゝ母様はこゝで死んだのだ。姉様もこゝでお眠りなすつたのだ。遠からず私もこゝで……：：：そう思へば壊かしい、いつそ早く母様や姉様のお傍に行きたいもの親子三人同じ病氣で同じこの倉座敷で果てると

は、今は義母昔は初と呼び捨てし身の、例の病氣と見れば皆此倉座敷に押込めて寄りもつかず。あゝ恐るゝは尤もなれど……

牛乳沸すべく乳母は臺所へいった。

千代子は、凹みたる目を微かに見開いて見やるともな  
く見つむる窓の障子、バサリ桐の一葉の散る影うつつた。

『姉様！』

戸口の方に微かな人の氣配、

『姉様は入つてよくつて』

千代子はふと耳傾けて居たがやがてまた、

『姉様！は入つてもいゝの』

『松ちゃんなのアゝおはいり』

静かに戸を開けて現はれたは髪をお下げにした、今年

十三の異姉妹。

『姉様こんなとこ淋しいでせう、何故こんなとこに轉つたの、病氣には悪るくないの？今あたしね學校から歸つたとこなのよ、あたしすぐに來ようと思つたらね、

あのう母様がね母様が……』

『まあよく來て呉れたのねえ、母様はいつちやいけな  
いつて仰言たんでせう？ね、それでも松ちゃん來て呉  
れたの、ほんとに乳母やと松ちゃんばかりなのね、親切  
にして呉れるのは……私死んでも忘れないことよ』

『え、姉様死ぬなんて……』

ぱつちりとした目を見張つてさもく驚いた様の可愛  
さ、千代子ははつと其手を取つて、

『オゝ御免なさいよ松ちゃん、でもねえ姉様はもう……』

……もう……』

サツと一陣の風外面に荒れて、と思ふと

『松ちゃんは何です！私があればど云つたのに……』

千代さんの病氣に悪るいでないか、さア早く彼方にお  
いで！』

自慢の金齒ちらりと初子の姿、

『でも母様……』

『いゝから早くおいでよ』

千代子の傍に居る松子を無理に引放そうとするを、

『あ、母様どうぞ……』

と立ち起ろうとした一刹那、俄にこみあげて白布を染  
た唐紅！

『さア松子、早く彼方において……いゝえ聞かない  
か危険いからさアいくんですよ』

と己も共に走り出でゝた。『乳母や！乳母や！』

雨のさゝやき。落葉の響。闇は何者かを呑まんとして  
襲ひ來た。

【入力者注】底本は総ルビですが、一部のみ残しまし  
た。

底本…「女子文壇」第貳卷第三號

明治三十九(1906)年三月

テキスト入力…小林 徹

公開…令和六年四月九日

リンク…「[作品年譜](#)」

[水野仙子ホームページ](#)